

EVT 後生じた骨髄炎を伴う脛骨前面広範組織欠損に対し，段階的血行再建及び遊離薄筋皮弁にて救肢しえた一症例

旭川医科大学 外科学講座血管外科学分野
三宅 啓介 (みやけ けいすけ ; 34 才)

重症虚血肢に対する血管内治療 (EVT) は device の進歩及び低侵襲性から広く用いられているが，不適切な EVT 治療に伴う下肢虚血増悪により大切断に至る症例も散見される．今回，EVT 後生じた骨髄炎を伴う脛骨前面広範組織欠損に対し，段階的血行再建及び遊離薄筋皮弁にて救肢し得た症例を経験したため報告する．

症例は高血圧の既往のある 73 歳男性，足部小潰瘍に対し複数回の EVT 施行歴あり．EVT 時の前脛骨動脈損傷にて compartment 症候群となった．下腿減張切開の後，広範組織欠損となり救肢目的に当教室紹介となった．本症例では，感染合併のため大切断の可能性は極めて高く，グラフト離断の可能性を考慮し，切断レベルを下げるため，後脛骨動脈バイパスに加え，腓腹動脈バイパスを併使した．wound preparation の後，末梢後脛骨動脈バイパスに加え，遊離薄筋皮弁で脛骨前面を被覆し，救肢を達成した．術後 1 年も骨髄炎再発なく，歩行状態を維持している．